課程博士学位請求論文
審査報告書ならびに審査結果

学位審査委員会：
主査　村尾　治彦
副査　吉井　誠
副査　虹林　慶
副査　大橋　浩（九州大学教授）

課程博士学位請求論文：A Cognitive Grammar Approach to *to*-Infinitive Constructions
審査対象学生：佐々木昌太郎
公開審査日：令和 4 年 2 月 12 日

（論文要旨）
本研究は認知言語学の中の特に Langacker（1987, 1990, 1991, 2008 など）の Cognitive Grammar（認知文法）の枠組みを用いて Control Cycle（コントロール・サイクル）という認知モデルを軸に英語の to 不定詞構文の特性を体系的に説明したもので、さらにそれを COCA（Corpus of Contemporary American English）のコーパスデータによってその分析の妥当性を裏付けたものである。

英語の to 不定詞はこれまで多くの先行研究によって扱われてきた。そこでは多様な to 不定詞の用法を主節動詞の意味に基づいて分類するものが多かった。本研究では先行研究に対して大きく４つの問題点を指摘している。１つ目は、to 不定詞構文の分類に関するものであり、Smith and Escobedo (2001) や Smith (2009) が典型的な用法から拡張的な用法まで４つに分類しているのに対し、この分類の基盤が明らかにされていない点である。２つ目は１つ目の分類の問題に関係するが、上記先行研究での分類は実際の言語使用に基づいた各用法の使用範囲が示されていない点である。特にその使用範囲の違いについて問題となる動名詞 ing との分布の違いが明示されていない。３つ目は、従来の主要な研究は主節述語に続く補部や付加部に生起する to 不定詞の分析が多く、主節主語に生起する to 不定詞の研究が不十分な点である。４つ目は、make などを用いた使役構文と see などを用いた知覚構文について、能動態では現れない to 不定詞が受動態で現れる理由が十分説得的に説明できていない点である。

本研究では Control Cycle（コントロール・サイクル）の概念からこれらの問題点を解決すべく、一貫した、体系的な分析がなされている。Control Cycle（コントロール・サイクル）は我々の認知活動に幅広く見られる認知プロセスで、認知対象に対する我々の対応を、

Baseline Phase（ニュートラルな状態）、Potential Phase（行為・出来事の実現が潜在的である段階）、Action Phase（行為・出来事が実現に向けて動き出している段階）、Result Phase（行為・出来事が実現している段階）の４つの段階から成る一連の循環的プロセスとみなす。このプロセスを応用した言語分析としては Langacker (2002, 2009) による that 節補文の分類があるが、それ以外にはあまり使用されていない。これを to 不定詞および動名詞 ing の意味分析に適応したのが本研究である。

まず第１章で本研究の目的が示された後、第２章で Control Cycle（コントロール・サイクル）の他、Profile（プロファイル）、Base（ベース）、Trajector（トラジェクター）、Landmark（ランドマーク）、カテゴリー化モデル、構文スキーマ、ネットワークなど、認知文法の基本的な道具立てが導入される。

第３章では、to 不定詞構文の主節述語の意味が Control Cycle （コントロールサイクル）上の Potential Phase (PP)、Action Phase (PP)、Result Phase (RP) のどの段階を表すかによって、以下のように大きく３つに分類されることが主張される。

(1) PP: a. I want to have him in jail.
b. I expect him to resolve his situation with us first.
AP: c. And I did this to take care of a seriously ill parent.
d. That evening, my grandfather went out to feed his animals ...
RP: e. I know you to be a resourceful lady.
f. I was surprised to find his wife waiting in the living room. (COCA)

さらに、８つの動詞について COCA からのデータに基づいて、to 不定詞構文が主に Potential Phase に集中する傾向があることを明らかにしている。また、比較調査として that 節を含む文が Result Phase に集中することを示している。

第４章では、調査対象の主節述語を COCA での使用頻度上位２０種類に広げ、さらに ing 構文と比較しながら Control Cycle（コントロールサイクル）での分布を検証している。結果として to 不定詞構文は Potential Phase もしくは Potential Phase に近い Action Phase に分布し、ing 構文は Result Phase に近い Action Phase に分布が集中することを明らかにしている。さらに、that 節を含む文の調査範囲も広げ、Result Phase に分布が集中することを確認し、３構文の分布の基盤となる抽象的なスキーマと具体事例に基づくネットワーク構造を提示している。これによって従来の研究でよく指摘されてきた to 不定詞構文、ing 構文、that 節構文がそれぞれ典型的に表す意味がなぜ未来性、時間的重なり、事実なのかを体系的に記述している。

第５章では、主語位置に生起する to 不定詞構文を考察対象としている。主語 to 不定詞構文は、主節述語に後続するもの及び ing 主語構文に比べて使用頻度が低いことをコーパスデータから示し、その理由を to 不定詞構文が内在的に持つ「方向性」が行為者を想起させるために依存的となり、主語に要求される自律性との相性を悪くすることから説明する。主節述語に後続する位置では自律性が求められないため使用頻度が高くなり、また、主語位置の

ing は行為者を想起させず、to 不定詞より自律性が高いために使用頻度が高くなると説明されている。

さらに、コーパス調査により、to 不定詞主語構文では主節述語に後続する（1）のタイプと異なり、(2a) の Result Phase に分布が集中することを明らかにしている。すなわち、Result Phase タイプの文は（未来性を含意する）意図性が薄いという意味特性があり、具体的方向性が希薄化し、相対的に依存性が弱まることから主語の自律性とより相性が良くなる点から説明される。

(2) RP: a. To live with regret is heavy.

PP: b. To live there as a student requires parental wealth …

AP: c. To write such words changed the meaning. (COCA)

方向性が希薄化したものが to 不定詞構文に生起するメカニズムとしては参照点認知を導入している。概念化者が to 不定詞の表す出来事に心的にアクセスし、それを参照点として主節述語の内容（to 不定詞の内容に対する判断・評価）に最終的に到達する心的な意識の流れにおいて Subjective Directionality（主体的方向性）が確立することから to 不定詞の使用を動機付けている。この Subjective Directionality（主体的方向性）は主節述語に後続するタイプで to 不定詞構文があまり集中しない phase に生起する非典型的例についても同様に適応され体系的に分析されている。

第 6 章、第 7 章では (3b)(4b) のような使役構文、知覚構文の受動態に to 不定詞が生じるメカニズムについて分析をしている。

(3) a. Mary made John drive the car.

b. John was made to drive the car. (Dixon 2005: 251)

(4) a. They saw John kick Mary.

b. John was seen to kick Mary. (Dixon 2005: 252)

この２構文について受動化されると結果状態に焦点があたり、能動態の時の Action Phase から Result Phase に移り、被使役者もしくは知覚の対象者と不定詞の事態の間に概念的距離が生じる。この事態を概念化する過程において概念化者が被使役者もしくは知覚の対象者から不定詞の事態にアクセスする際に Subjective Directionality（主体的方向性）が確立され to 不定詞の使用が起こると説明されている。

（評価）

本研究は to 不定詞の特性を動名詞 ing などと比較しながら認知文法の枠組みで体系的に説得的に分析した意欲的、画期的内容である。認知文法の諸概念を的確に援用し、その主張の妥当性をコーパスデータを用いて実証的に示している。また認知文法の図式も効果的に用いて議論を明快で説得的なものにしている。特に Control Cycle（コントロールサイクル）の概念を to 不定詞の分析に応用している点は斬新で興味深く、to 不定詞研究を大きく発展させうるものである。Control Cycle（コントロールサイクル）の提唱者である Langacker (2002,

2009) 自身は that 節補文へは適用しているが、to 不定詞の分析を行っていない。to 不定詞や ing 構文へと分析の適用範囲を拡張できることを説得的に示したことに加え、コーパスデータによる量的な検証を行ったことなど、認知文法に対する本研究の理論的貢献度は高い。また、従来体系的に扱われることのなかった、to 不定詞主語構文に適応した点には新規性も認められる。各章を通して Control Cycle（コントロールサイクル）の観点から一貫して分析が行われ、理論的体系的にまとまった論考である。

その他注目すべき分析としては、未来志向を表す典型的な用法（Potential Phase もしくは Potential Phase に近い意味を表す Action Phase に属するタイプ）から逸脱する不定詞用法も、Subjective Directionality（主体的方向性）という認知プロセスの前景化によって一貫した説明を行っていることがあげられる。また、Langacker による that 節補文分析を参照しつつ、Action Phase を下位分類し、より厳密に to 不定詞が Potential Phase 寄り、ing 動名詞が Result Phase 寄りであることを示し、Control Cycle（コントロールサイクル）内における両者の使用分布の差異をより明確にすることで両構文の分布特性を説得的に示したことも本研究の優れた点であると言える。

本研究はコーパスデータから実際の使用例を収集してボトムアップ式にスキーマを抽出して各用例間のネットワークを構築している点で、認知文法の基盤でもある Usage-Based Model（使用基盤モデル）に沿った分析を忠実に実践していて評価できる。ただし、今回の研究では、COCA からの実例を対象に分析しているものの、該当する文レベルの考察にとどまり、前後の文脈を考慮した談話レベルの考察には広げられていない。また、第６章、第７章で使役構文、知覚構文の受動態に to 不定詞が生起する問題に対する分析では第３章～第５章の分析と比較するとややコーパスデータによる使用頻度、分布などによる分析が不足している面がある。とは言うものの、今回の論文で提示した問題点については十分考察し結果が出されており、本研究の主張の説得力を弱めるものではない。第８章の今後の展望では、談話が文法を構築するという近年の認知文法の研究の流れに沿って、本論文で明らかにした to 不定詞構文の特性がどのように談話研究の中で進められる可能性があるかに触れており、今後この観点での研究の広がりを期待させる。

あえて本研究における物足りなさを指摘するとすれば、Langacker の認知文法の枠組みの中ですべての分析がなされている点が挙げられる。しかし、研究の進展に伴い、理論の発展や修正などにつながる可能性はあり、本研究自体は博士論文として十分評価できる内容である。その他、理論的用語、概念の説明が初出では示されず、後の分析や注で説明されている箇所が散見され、専門家以外の読み手は戸惑う可能性がある点は改善の余地がある。

上で触れたように、本博士論文には改善点や今後の課題もいくつか見られるが、全体を通して分析が丁寧になされているし、各章が単独で発表された論考をもとにしているにも関わらず、クロスレファレンスなどにより各章の繋がりも工夫されており、読みやすく好感の持てる論文である。それだけではなく、発表論考についての学会誌の査読者や学会での口頭発表のコメントに対する回答として答えられているところを多く含み、その意味で考えら

れる課題に対してもすでに考察が深められており、完成度が高い。執筆言語である英語は全体的に文法的にも文体的にも、また当該分野での慣習的な言い回しにも沿っており概ね良くできている。

今後のこのテーマにおける研究の広がりや発展性においても期待でき、to 不定詞の分析に Control Cycle（コントロールサイクル）を導入することで to 不定詞の使用特性の解明にとどまらず、動名詞 ing、that 節補文その他の英語補文構造全体を視野に入れて、なぜ英語においてこのような種類の補文構造が存在しているのかを体系的に説明できる可能性を秘めた理論的にも記述的にも非常に意義深い研究と言える。認知プロセスによって言語特性が説明できるという認知言語学の基本テーゼを見事に実践して見せた論考と言え、理論への多大な貢献がなされていると思われる。

以上の点を踏まえ、学位審査委員会としては本博士論文が以下の点から、「大学院文学研究科博士後期課程・ディプロマポリシー」に合致するものであり、「熊本県立大学大学院文学研究科博士後期課程 学位論文審査基準」の審査基準を満たしており、博士（文学）の学位授与が適当であると判断する。

１）to 不定詞の分析において Control Cycle（コントロールサイクル）を導入し、主節述語に後続するタイプおよび主節主語に生起するタイプの分布特性を理論的に、またコーパスデータによって実証的に明らかにしている点において、独自性、新規性のある研究であること

２）先行研究の問題点に対して理論的、実証的に詳細に分析し、丁寧で論理的な議論を行い、説得力のある対案を提出している点において、学術研究として評価できること

３）本論文の大部分は学会での口頭発表や論文の公刊によって学界においてすでに評価されたものであること

以上